

【論文】

感情・感覚を表す擬態語動詞の動詞性について

——「ずきずきする」と「ざらざらする」の相違は何か——

吉 永 尚

1. はじめに

従来のオノマトペ研究は、音韻的な分析を中心としているものが多く、動詞用法、特に感情や感覚を表す擬態語動詞¹⁾に焦点を当てた研究はかなり少ない。これらは状態性が強いものとして一括りに考えられることが多かったが、本研究では意味・用法の相違に基づき、四分類する。これらを、アスペクト性、他動詞性、非能格・非対格性などの動詞的性質の観点から観察し、二類は状態性が強いが、他の二類はそうでないことを論じ、一括りに扱うことには問題があることを提唱する。最後に、これらの擬態語動詞全体についての語彙的な特性について考察する。

2. 擬態語動詞の先行研究

「くよくよする」「べとべとする」など、外見に表出しない感情や感覚を表す擬態語動詞²⁾の文法的性質には未だ不明な点が多い。影山 (2005: 1, 7) は擬態語動詞一般を、「する」の意味構造の鑄型に擬態語の意味が組み込まれ通常動詞と同等になる」とその動詞性を肯定しており、田守 (1993: 45-47) は人間の心理・感覚を表す「擬情語」は、ほぼ全て動詞組入れが可能と述べ、動詞組入れできない状態的な擬態語との相違を示唆している。心身の擬態語動詞を用法や意味によって分類し、それぞれの文法的性質について観察する。

3. 心身の擬態語動詞の分類

心身の擬態語動詞³⁾の擬態語部分へ「だ」や「の+名詞」を付加すると、「うずうず (*だ。/の学生)」、「ずきずき (*だ。/の頭)」などほぼ許容されないものと、「べとべと (だ。/の手)」、「とろとろ (だ。/のチーズ)」など自然に許容されるものに分かれる。これらを意味によって二分し、下に示す様に A、B、C、D の四類に分類する⁴⁾。「だ」や「の+名詞」を付加できる点で、II) C、D はナ形容詞的な用法があると判断する⁵⁾。

- I) 「だ」や「の+名詞」が → TypeA-心理的感情を表すもの
 一般的に付加されないもの ↘ TypeB-生理的感情を表すもの
- II) 「だ」や「の+名詞」が → TypeC-感触を表すもの
 一般的に付加されるもの ↘ TypeD-食感を表すもの

◆TypeA (心理的感情：心的活動や変化を表すもの)

わくわくする、うずうずする、いらいらする、はらはらする、くさくさする、くよくよする、う
 じうじする、びくびくする、むしゃくしゃする、やきもきする、ほっとする、かっとする、はっ
 とする、ぎょっとする、ひやっとする、どきっとする、うっかりする、げっそりする、しみり
 する、ポーッとする

◆TypeB (生理的感情：身体感覚・痛覚などの異常を表すもの)

ずきずきする、きりきりする、がんがんする、じんじんする、ちくちくする、ちかちかする、ひ
 りひりする、びりびりする、どきどきする、むかむかする、むずむずする、ぞくぞくする、しく
 しくする、しょぼしょぼする、くらくらする、ちくっとする、ふらっとする、ぞくっとする、す
 っとする

◆TypeC (感触：触覚による皮膚感覚を表すもの)

ざらざら (だ/する)、さらさら (だ/する)、つるつる (だ/する)、ぬるぬる (だ/する)、ねとね
 と (だ/する)、べとべと (だ/する)、べたべた (だ/する)、すべすべ (だ/する)、ふわふわ (だ
 /する)、ごわごわ (だ/する)

◆TypeD (食感：飲食に関する感覚を表すもの)

ぶりぶり (だ/する)、さくさく (だ/する)、こりこり (だ/する)、もちもち (だ/する)、ほくほ
 く (だ/する)、ねばねば (だ/する)、とろとろ (だ/する)、ほそほそ (だ/する)、こってり (だ
 /する)、あっさり (だ/する)⁶⁾

4. 心身の擬態語動詞の文法的性質について

4.1 用法の相違

小説の地の文の様な人称制限から開放された文を除く一般的な感情・感覚文では、述語の位置
 や形により人称制限が異なる。A、B では言い切りの形の主節述語の場合主語はほぼ一人称で、
 ガ格が示す部位は話者のものに限定される。C、D は用法で相違が見られ、(3) (4) は話者の直
 接経験に基づく感覚を表すが、(5) (6) では客観的な性質を表す。

- (1) 私_ハ 大きな物音_ニ ぎょっとスル⁷⁾。 [A]
 (2) (私_ハ) (私の) 喉_ガ ひりひりスル。 [B]
 (3) (私_ハ) (私の) 手_ガ べとべとスル。 [C]
 (4) (私_{ニハ}) この鮑_ハ こりこりシテイル。 [D]
 (5) 旅館の浴衣_ハごわごわ_ダ/すべすべ_ノ類 [C]

(6) クリスピータイプのピザ生地ハさくさくダ/こりこりノ鮑 [D]

A では感情の対象を表す二格を項として取る事ができるが、B、C、D では感覚対象の項をほぼ取らない。また、C、D には評価的形容詞文の述語用法や名詞修飾用法があるが、書き言葉で A、B の形容詞用法は一般的ではない。また、(4) は (3) よりも属性叙述度が高く、D は C より物の評価性が強いと判断する。

4.2 アスペクト性の相違

心身の擬態語動詞は一般的に状態性が強いとされているが、時間句との共起によってアスペクト性を観察する⁸⁾。(*は「許容されない」??は「かなり不自然」?は「不自然」を示す。)

◆TypeA (心理的感情)

- (7) 怖い先生の授業の間ずとびくびく (している/?する)。
 (8) 前の車に追突しそうな瞬間、ひやとした。

◆TypeB (生理的感覚)

- (9) 試験の間ずと胃がむかむか (している/する)。
 (10) 寒い屋外に出た瞬間、背中がぞくとした。

◆TypeC (感触)

- (11) *食事の間ずとテーブルクロスがごわごわ (している/する/だ)。
 (12) *テーブルに触った瞬間、ぬるぬるした。

◆TypeD (食感)

- (13) *食べている間ずと団子がもちもち (している/する/だ)。
 (14) *エリンギを食べた瞬間、こりこりした。

A は比較的顕著なアスペクト性を示す。時間句⁹⁾を入れると (7) のテイル形では継続の意味が明確になるがル形ではやや悪く、(8) の促音タイプでは瞬間的心理変化を明確に表す。(9) では相違が殆ど無く継続性が不明瞭で、B が身体部位の間接的な感覚を表すためと考える。しかし、(10) では瞬間的な体感変化を示し促音はアスペクト性に強く関与する¹⁰⁾。(11) (13) ではどの形式も時間句の容認度が低く、(12) (14) でも同様に低い¹¹⁾。C、D は共にアスペクト性が顕現せず状態性が強いが、テイル形では実体験による感覚を含意し、恒常的でなく一時的な属性を表すと判断する。アスペクト性を表1にまとめる。

表1 アスペクト性の相違 (○=容認、△=一部容認、×=容認されない)

時間的性質 \ Type	A		B		C	D
	豊語タイプ	促音タイプ	豊語タイプ	促音タイプ	豊語タイプ	豊語タイプ
継続アスペクト	○	×	△	×	×	×
瞬間アスペクト	×	○	×	○	×	×
開始アスペクト	○	×	○	×	×	×

(C、D の強調形の促音タイプは「だ」が付加されないので除外する)

4.3 非能格性・非対格性

「働く」「思う」等の非能格動詞は動作主 (Agent) や経験者 (Experiencer) が主語で目的語を取らず、「沈む」「在る」等の非対格動詞は主に対象 (Theme) が主語で意志性が無い。これらの動詞との共通点について考察する。

◆他動性の有無－目的語を取れるかどうか

- (15) *私はバスの延着をいらいらする。(ok バスの延着に) [A]
(16) *私は二日酔いを頭がずきずきする。 [B]
(17) *私は餃子作りを手がべとべとする。 [C]
(18) *私はパスタをチーズがとろとろする。 [D]

A では感情の対象の二格は許容されるが、他動性を示す目的語標示のヲ格項はほぼ許容されない。A、B、C、D で文環境をどの様に整えても、目的語が項として許容されることはほぼ無く、辞典、コーパスの用例でも明確な目的語を示す例が見られない事を考え合わせ、全て自動詞と判断する。

◆意志性の有無－ a. 命令文、b. 禁止命令文、c. 意向形への変形の可否

- (19) a. *いらいらしなさい b. いらいらするな c. *いらいらしよう [A]
(20) a. *ずきずきしなさい b. *ずきずきするな c. *ずきずきしよう [B]
(21) a. *つるつるしなさい b. *つるつるするな c. *つるつるしよう [C]
(22) a. *こりこりしなさい b. *こりこりするな c. *こりこりしよう [D]

(19) では、a. 命令形、c. 意向形は意味的制約から非文になると思われ、A では意志性がやや認められるが、B、C、D ではほぼ全て許容されない。

◆非能格性－使役受身文 (埋め込まれた非対格動詞主語は使役受身文が不可)

- (23) 私はいつも会社で深夜まで働かされる。 [非能格動詞]
(24) 私はいつもこの踏み切りにいらいら (ひやっと) させられる。 [A]
(25) *私はいつも二日酔いに頭がずきずきさせられる。 [B]
(26) *私はいつも餃子作りに手がべとべとさせられる。 [C]
(27) *私はいつもシチューにジャガイモがほくほくさせられる。 [D]

A ではほぼ許容され非能格動詞の可能性が高いが、B、C、D では許容度が低い。

◆非能格性－「てもらう」文 (埋め込みの非対格動詞主語は使役依頼不可)¹²⁾

- (28) 昨日、お隣の小学生に子どもと遊んでもらった。 [非能格動詞]
(29) 客には、まず風呂でさっぱりしてもらった。 [A]
(30) *赤チンで傷口にじんじんしてもらった。 [B]
(31) *粘土細工で手にべとべとしてもらった。 [C]
(32) *シチューでジャガイモにほくほくしてもらった。 [D]

A で許容されるものは非能格動詞の可能性があるが B、C、D は全て許容度が低い。

◆非対格性－数量詞遊離¹³⁾の許容度

- (33) [IP 窓ガラスが [VP 昨日の台風で3枚 (ほど) 割れた]]. [非対格動詞]
 (34) ??[IP 客が [VP レジ待ちの列で5人 (ほど) いらいらした]]. [A]
 (35) [IP 左足の指が [VP 水虫で3本 (ほど) むずむずする]]. [B]
 (36) [IP 奥の歯が [VP 歯槽膿漏で2本 (ほど) ぬるぬるする]]. [C]
 (37) [IP カレーの芋が [VP 生煮えて3個 (ほど) ごりごりした]]. [D]

B、C、D ではほぼ許容され非対格動詞の可能性が高い。しかし、A も「いらいらしている(た)」に換えると許容され、主語の生成位置以外に文環境等の要因が関与していると思われる¹⁴⁾。慎重な検証が必要であるが、A は心理主体を Experiencer 主語とする非能格動詞、B、C、D は感覚・変化対象 Theme を主語とする非対格動詞と考えられる。B は A より時間的性質が弱く、C、D は状態性が強いと思われる。従来、心身の擬態語動詞は一括りに状態性が強い動詞とされてきたが、「いらいら」「ずきずき」など動詞用法のみの動詞にはアスペクト性(時間的性質)が見られ、「ざらざら」「こりこり」など形容詞用法も合わせ持つものにはアスペクト性(時間的性質)が見られず、動詞的性質の点で明らかな相違がある。また、「いらいら」などは非能格性を示し、心理動詞と類似した性質を持つ。

4.4 心身の擬態語動詞の語彙特性について

心身の擬態語動詞は、「する」単独では項を取らない。

本来的に持つ擬態語固有の意味要素が「する」と結びついて動詞的性質が完成される。時間的性質を持つ A、B は「する」を、状態的性質が強い C、D は「だ」を選択するが、C、D は何らかの出来事性を内包し「する」とも結びつく¹⁵⁾。促音、畳語などの形態はアスペクトに関与し、感情・感覚の個別の意味、述語の項構造、意志性などの性質は非能格・非対格性に関与する。A～D の文法的性質を表 2 に示す。

表 2 心身の擬態語動詞の文法的性質 (○=許容、△=一部許容、×=許容されない)

Type \ 語彙特性	A	B	C	D	
「する」の付加	○	○	○	○	動詞性
アスペクト性	○	△	×	×	↓ 形容詞性
非能格性	○	×	×	×	
「だ」の付加	×	×	○	○	
	動詞性 → 形容詞性				

擬態語自体の品詞性については、名詞用法を持つものが多く単独で間投詞的に用いる事もあるので名詞性が強いと判断する¹⁶⁾。加藤 (2015: 55-56) は名詞、副詞、ナ形容詞、連体詞を「体詞」として一つのグループに括る事を提唱し、動作性・状態性により名詞を四区分している。こ

の区分に従うと A、B は動詞用法を持つ動作名詞、C、D は動詞・ナ形容詞用法を共に持つ両用名詞に近いと判断する¹⁷⁾。

5. おわりに

感情・感覚を表す擬態語動詞は一様に状態性が強いとされてきたが、文法的性質にはかなり差があることがわかった。これらの相違は、其々の擬態語固有の形態や意味、性質などによるもので、動詞的性質の相違となって表れている。「ずきずきする」など心身の状態を表すものにはアスペクト性が見られ動詞性を示すが、「ざらざらする」など形容詞的用法を持つ静的なものにはアスペクト性が認められず、動詞性が弱い。つまり、擬態語動詞 AB は動詞としての性質が明らかに表れるが、形容詞的性質を併せ持つ CD は動詞的性質が形骸化している。擬態語の日本語教育でも誤用原因に動詞、副詞など用法の理解不足が指摘されており、擬態語の語彙性質の更なる精査が課題である。(本研究の一部は科学研究費研究助成：15 K 02670 により行われました。)

注

- 1) 本稿は人間が直接体験する感情や感覚を表すものを対象とし、動作性・外見表出性が高いもの(「うろうろする」「にやにやする」等)は動作動詞として除外する。
- 2) 以下、「感情や感覚を表す擬態語動詞」を「心身の擬態語動詞」と呼ぶ。
- 3) 本稿の語彙は、書き言葉に限定し、感情・感覚の擬態語で「～する」の形になるものを章末の辞典・BCCWJ から収集した。「くたくた」「めろめろ」等「する」が付かないものは除いた。
- 4) 辞典や BCCWJ の用例をもとに分類している。A、B にも「びくびくだ」「どきどきだ」などは「だ」が許容され、「いらいら」などは「いらいらの原因」「いらいらが募る」など形容詞・名詞用法も見られるが、用例数が多い I) に含める。感情と感覚が両義の「どきどき」「ぞくぞく」などは感覚から感情に意味拡張したものと判断し、感覚に含めている。
- 5) 「?サラサラな髪」より「サラサラの髪」が自然であるが、状態変化を表す場合、「すべすべになる」のように「に」(連用形)に変わり共通点が多いので、便宜的にこの用法をナ形容詞用法と見なす。また、殆どの擬態語には副詞としての連用用法がある。
- 6) 「ずっくん」「ふんわり」など促音、撥音、濁音、「り」などを伴い、強調形が形成される。C、D の強調形で「ぬるっと」「こりっと」など「だ」が付加されないものは除外する。
- 7) 心理動詞のル形は「僕は半年で飽きる。」の様に多くは未来事態や習慣を表すが、「これにはまいる。」など現在の事態を代用的に表す場合もある。ル形で現在の状態を表す点は状態動詞と共通するが、これだけで状態動詞であるとは断定できない。
- 8) 例えば、工藤(2014: 45-50)では「ずきずきする」等を「一時的な静的現象を表す状態動詞」としている。継続の時間句「ずっと」は「改装が終わるまでずっと閉店だ」など状態文とも共起し、直ちには継続性の証明にはならないが、共起した際の文末形式による文法性の相違を見るために用いる。「瞬間」は短時間の事態変化の含意があるかどうかを見るために用いる。テ形や「シテイタ」形では許容度が高くなるので、全て言い切りの現在形で観察する。
- 9) 一般的に、「○●○●」型の畳語タイプは動作・状態の継続を表現し、継続の時間句と共起しやすく、「○っ」と型の促音タイプは変化性・瞬間性を含意し瞬間の時間句と共起しやすい。
- 10) 心身の擬態語動詞の瞬間性を表すもので、テイル形で結果解釈(金田一(1950))になるものは「終

わってほっとしています」等少数であり、テイル形にならないものも多い。開始アスペクトでは A、B で「いらいら/ずきずきし始めた」は言えるが、C、D で「*つるつる/*こりこりし始めた」は許容されず、いずれも畳語タイプに限られ促音タイプは許容されない。

- 11) 「?触った瞬間、ぬるっとした。」「?噛んだ瞬間、こりっとした。」は促音の瞬間性により許容度が上がると思われるが、「だ」が付加できず B に近付いていると判断する。
- 12) 語彙群の全ての動詞に当てはまるわけではないが、動詞性観察のデータとして挙げる。
- 13) 一般的に、非能格動詞の主語（外項位置）は数量詞遊離ができないのに対し非対格動詞の主語（元内項位置）は数量詞遊離ができるとされている。基底生成その他に関し不明な点が多く絶対的な基準ではないが、文法的性質の相違の一例として挙げる。
- 14) 三原（1998）では、テイル形は「限定的継続」を含意し、数量詞連結（遊離）構文を成立させる「文脈的アスペクト限定」を内在化しているため許容されると分析している。また、状態性述語でも「一時的状態」を表す場合は「変化結果」を含意するので許容されると言う。
- 15) 影山（2005）は「する」は補部に出来事を選択し「状態」は直接補部になれないとしている。私見では、C、D は恒常的でなく一時的感覚を表すため、出来事性の含意に繋がると判断する。
- 16) 「到着」など動作性を内包する名詞は「到着する」、「聡明」などの形容詞性を内包する名詞は「聡明だ」の様に動詞やナ形容詞を形成し、擬態語も平行的に考えられる。また、BCCWJ では殆どの擬態語の品詞区分を「副詞」、少数を「名詞」としている。
- 17) 加藤（2015:60）は、擬態語「ゆっくり」「しっかり」は体詞（副詞類、連用詞、H 類）と分類しているが、他の擬態語については特に言及していない。

参考文献

- 影山太郎（2005）「擬態語動詞の語彙概念構造」第 2 回中日理論言語研究会発表要旨。
加藤重広（2015）「形容動詞から見る品詞体系」『日本語文法』15 巻 2 号, 48-64, くろしお出版。
金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンソ・アスペクト論』ひつじ書房。
田守育啓（1993）「日本語オノマトベの統語範疇」筧壽雄・田守育啓（編）『オノマトピア擬音・擬態語の楽園』, 17-75, 勁草書房。
浜野祥子（2014）『日本語のオノマトベ』くろしお出版。
三原健一（1998）「数量詞連結構文と「結果」の含意 [下]」『月刊言語』Vol.27 No 8, 104-113, 大修館書店。
吉永尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院。
吉永尚（2012）「テ形節の意味と統語」『活用論の frontline』pp.79-114, くろしお出版。
吉永尚（2016）「感情・感覚を表す擬態語の語彙特性についての考察 - 擬態語動詞の観察を中心に -」日本言語学会第 153 回大会発表予稿集, 104-109。

辞典・コーパス等

- 小野正弘編『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトベ辞典』小学館, 浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典 (角川小辞典 12)』角川書店, 飛田良文・浅田秀子『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版, BCCWJ (国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス (中納言)」), 吉永尚・廣部久美子『日中英医療介護 Healthcare』スマートフォンアプリ (Apple 社)

[よしなが なお 日本語教育・日本語学]